

特殊器台弧帯文の施文方法

小林 萌絵

要旨 特殊器台は、弥生時代後期後葉から古墳時代初頭に使用されていた祭祀土器である。そのため、特殊器台が時代の転換期を示す指標の一つとして考えられており、特殊器台を研究することは、古墳時代の成立を考える手がかりになるといえる。

特殊器台胴部には、沈線の帯によって弧と直線で表現されている弧帯文という文様が描かれている。弧帯文は特殊器台と同様に弥生時代後期後葉の吉備から出現しており、古墳時代初頭まで使用されていた。このことから、弧帯文もまた、古墳時代の成立を考える手がかりの一つであるといえる。

本論では、特殊器台に描かれた弧帯文の施文方法についての検討をおこなった。その結果、特殊器台弧帯文の施文方法を八通りに分類することができた。また、施文方法の変遷についての検討もおこなった。弧帯文の施文方法は立坂型からはじまり、向木見型弧帯文や宮山型弧帯文で分岐した。このことにより、様々なパターンの弧帯文が出現したのだと考えられる。

はじめに

特殊器台は、弥生時代後期後葉から古墳時代初頭の墳墓遺跡を中心に出土が確認されている祭祀土器である。特殊器台の出土が吉備周辺や大和周辺で多数確認されていることから、特殊器台は当該時期における吉備と大和の地域間交流を考える手がかりの一つとして考えられている。また、時代の転換期に使用されていたことから、古墳時代の成立を考える手がかりとしても考えられている。

特殊器台について、現在でも引用されている説は、近藤義郎・春成秀爾の両氏によっておこなわれた特殊器台の型式学研究である（春成 2011）。近藤・春成は、特殊器台を器形と文様から立坂型（第1図－1・2）、向木見型（第1図－3）、宮山型（第1図－4）、都月型（第1図－5）の四型式に分類し、それぞれの相対年代を整理した。その結果、立坂型、向木見型、宮山型、都月型の順番に特殊器台は変遷し、特殊器台を起源に円筒埴輪が成立すると結論づけた。その後も、前方後円墳の成立についての議論にも関連して、特殊器台についての研究は多くの研究者によって進めら

れている。春成は近年、特殊器台の型式学研究の見直しをおこなっており、従来の向木見型や宮山型は、より細分化できるという考えを新たに示している（春成 2017・2018）。

特殊器台の弧帯文についての研究も、多くの研究者によって進められているが、弧帯文の施文方法についての研究はみられないため、本論では、特殊器台に描かれた弧帯文の施文方法についての検討をおこなう。

本論において特殊器台の変遷は、従来の研究を参考にしている（春成 2011）。なお、本論は筆者が提出した学位請求論文に加筆修正を加え、再検討をおこなったものである。

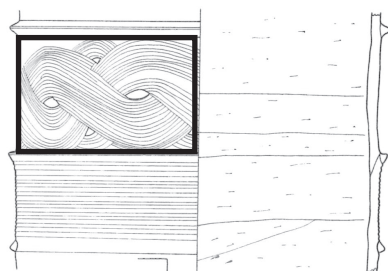
1 立坂型特殊器台の弧帯文

（1）立坂型弧帯文 a 類

立坂型特殊器台に施文された弧帯文は、二つに分類することができる（春成 2011）。

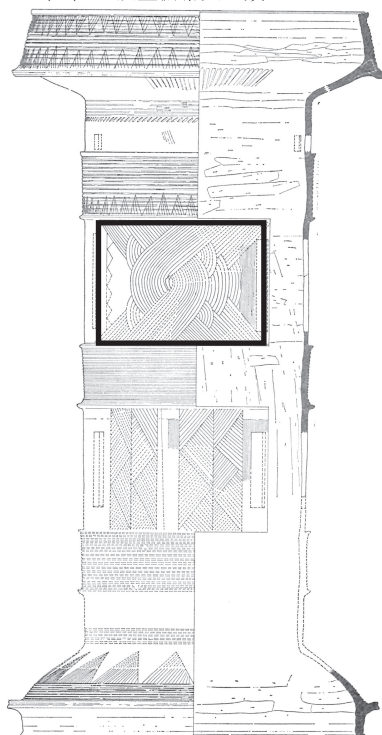
第一は、二本の帯が横方向に連続しながら交差する文様である。これを便宜上、立坂型弧帯文 a 類とする（第1図－1）。

(1) 立坂型弧帯文 a 類



枠線は第2図の範囲 (縮尺不詳)

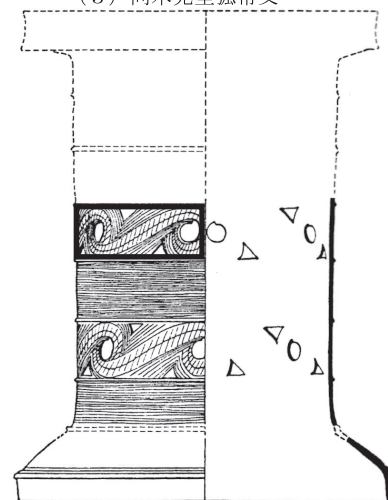
(2) 立坂型弧帯文 b 類



0 30 cm

枠線は第3図の範囲

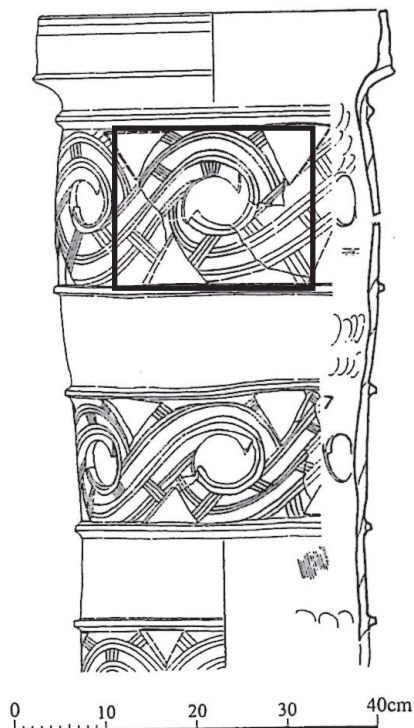
(3) 向木見型弧帯文



0 50 cm

枠線は第4図の範囲

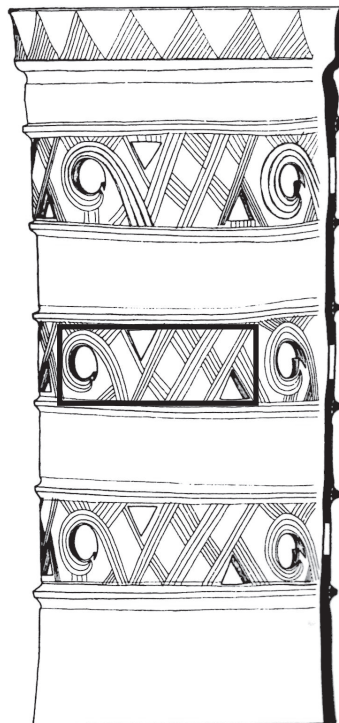
(4) 宮山型弧帯文



0 10 20 30 40 cm

枠線は第5図の範囲

(5) 都月型弧帯文



0 10 20 cm

枠線は第6図の範囲

- (1) 立坂遺跡出土資料
- (2) 黒宮大塚弥生墳丘墓出土資料
- (3) 向木見遺跡出土資料
- (4) 葛本弁天塚古墳出土資料
- (5) 箸墓古墳出土資料

第1図 特殊器台の弧帯文

第二は、立坂型弧帯文 a 類の文様構成から一単位とりだし、それを 90 度に回転したものを横方向に連続させた文様である。これを便宜上、立坂型弧帯文 b 類とする（第 1 図－2）。

はじめに、a 類の施文方法について、実際に作図をおこなう（第 2 図）。弧帯文の作成手順は、該当資料から予測した。今回、参考にした資料は、岡山県総社市立坂遺跡^{たちざか}から出土した資料である。

手順 1：文様帯に任意の点 ABCD を決め、文様帯のなかに任意の点 O と点 O' を定める。

手順 2：点 O と点 O' の間を蛇行する線を描く（線 1）。このとき、下から上に向かって弧を描く線は点 O に近く、上から下に向かって弧を描く線は点 O' から離れた位置に描く。

手順 3：線 1 と並行する線を描く（線 1'）。

手順 4：点 O' を起点に線 1・線 1' で描いた線と同様の線を描く（線 2・線 2'）。

手順 5：手順 2 と手順 3 を繰り返し、文様帯のなかを一周するように横方向に描く。その結果、点 O を中心にレンズの形が形成される。その形に沿って透孔を形成する。

手順 6：線 3 から線 2' に向かって、線 1' に沿って弧を描く（弧 1）。

手順 7：弧 1 から線 2' に向かって二つの弧を描く。

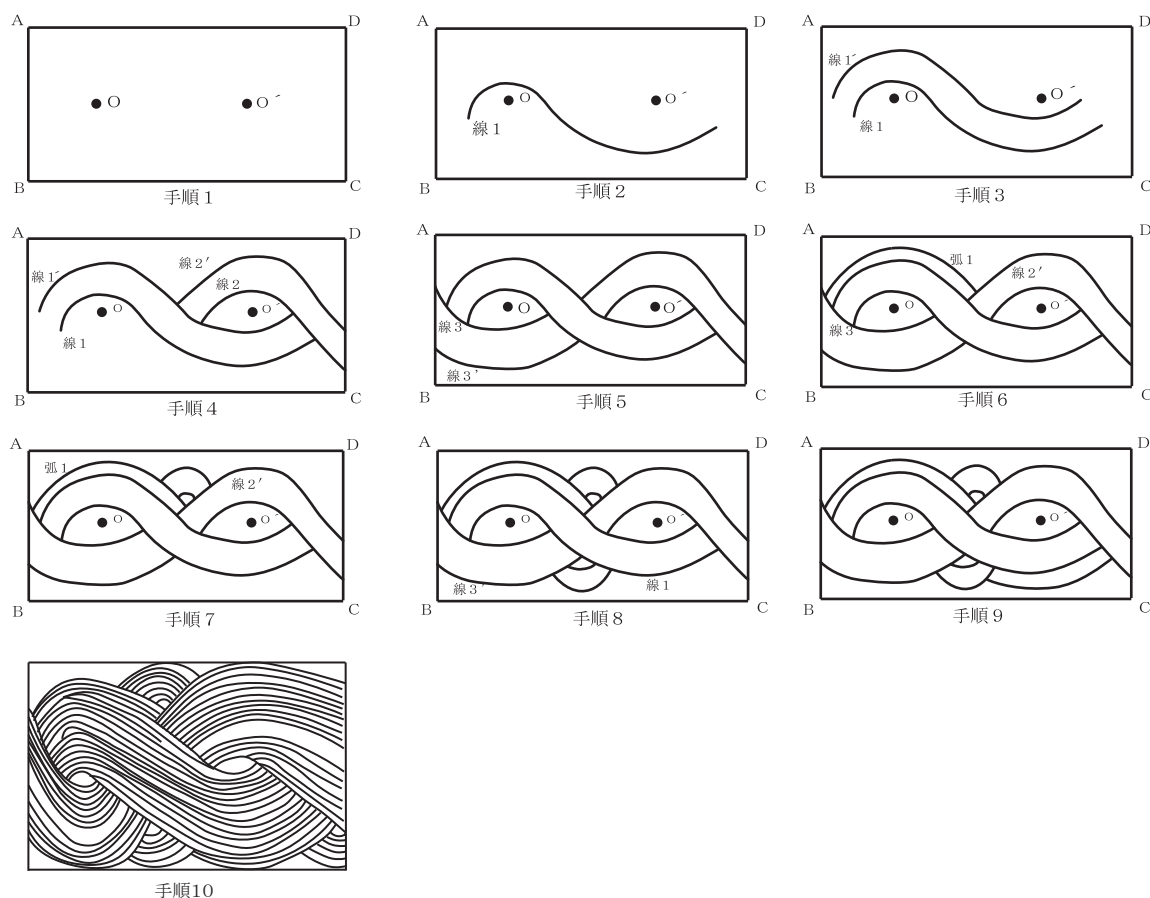
手順 8：線 3' から線 1 に向かって二つの弧を描く。

手順 9：手順 8 で描いた外側の弧から線 2 に向かって、線 1 に沿って弧を描く。

手順 10：帯の内部に線を描く。

手順は、以下の五つにまとめることができる。

- 1 二本一束の帯を二本用いて、弧を描く。
- 2 弧を左下から右上方向に描く。
- 3 文様一単位を連続させて描く。



第 2 図 立坂型弧帯文 a 類の施文方法

- 4 透孔は弧を描いた後にあける。
- 5 二本一束の帯内部に線を描く。

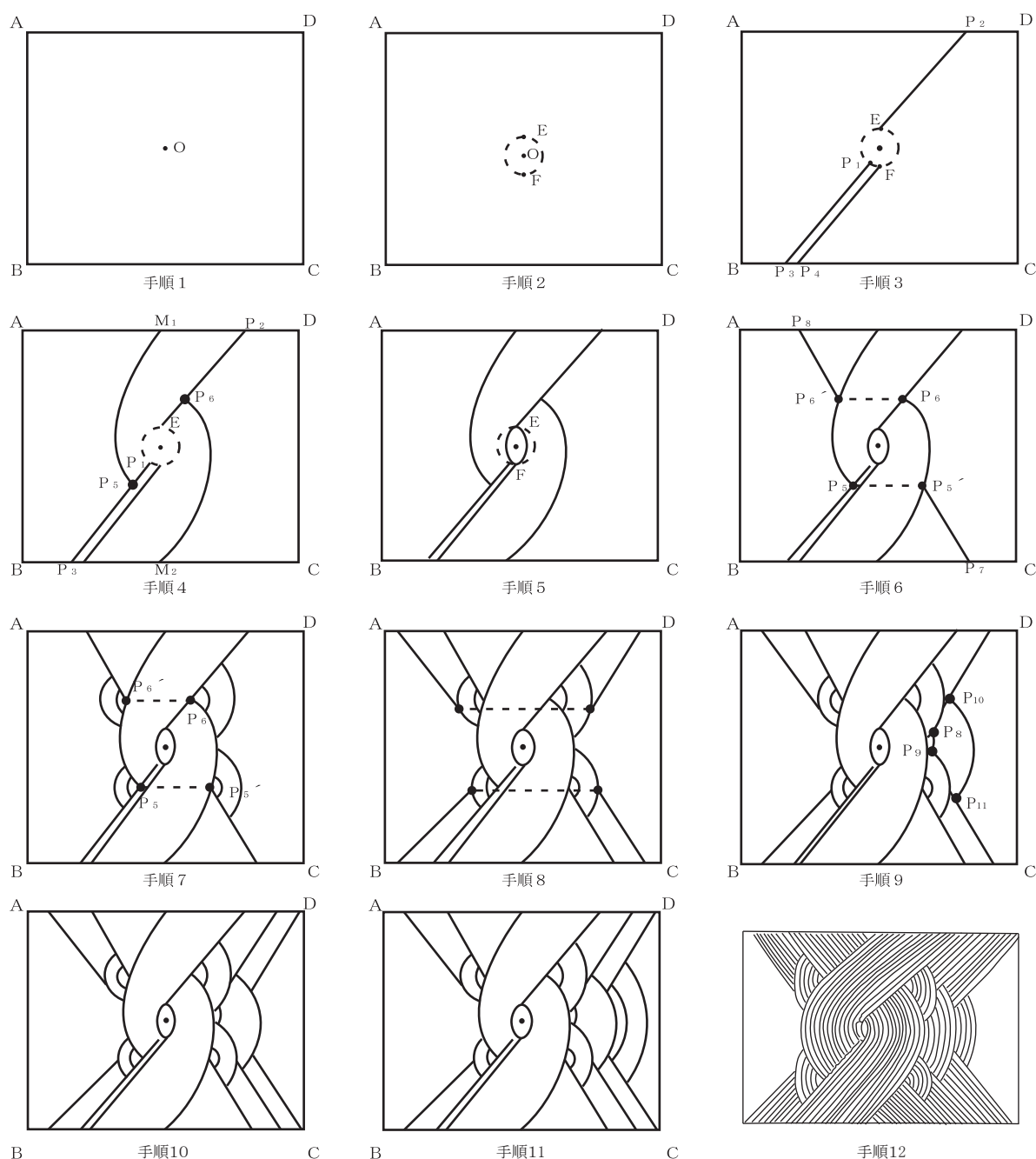
(2) 立坂型弧帯文b類

立坂型弧帯文b類の施文方法について、実際に作図をおこなう(第3図)。弧帯文の作成手順は、該当資料の、線の切りあい関係から予測した。今回、参考にした資料は、岡山県倉敷市黒宮大塚弥生墳丘墓出土資料である。

手順1：文様帯に任意の点ABCDを決め、その中心点を点Oとして定める。

手順2：点Oを中心に半径が任意の円Oを描く。円O上に点Eと点Fを定める。

手順3：点Eから辺AD上の点P2に向かって直線を描く。点Fから辺BC上の点P4に向かって直線を描く。また、弧FE上の任意の点P1から辺BC上の点P3に向かって直線を描く。



第3図 立坂型弧帯文b類の施文方法

手順4：辺P1P3の任意の点P5から辺AD上の中点M1に向けて弧を描く。また、辺EP2の任意の点P6から辺BC上の中点M2に向けて弧を描く。

手順5：点E、点Fからそれぞれ、円Oがレンズ形になるように弧を描く。形成された形に沿って透孔をあける。

手順6：点P5から延ばした直線と弧P6M2との交点を点P5'。そこから辺BC上の点P7に向かって直線を延ばす。また同様に点P6から延ばした直線と弧P5M1との交点を点P6'。そこから辺AD上の点P8に向かって直線を描く。

手順7：点P5、点P5'、点P6、点P6'それぞれを中点と定め、弧を二つずつ描く。

手順8：手順7の外側の弧に任意に点を置き、そこから辺AD、辺BC上にそれぞれ直線を描く。

手順9：手順7の右側外部の弧上に任意の点P7、P8を置き、両点を起点に弧を描く。手順8の直線上に点P9、P10を置き、両点を起点に弧を描く。

手順10～11：手順9を繰り返しおこなう。

手順12：帯の内部に線を描く。

手順は、以下の五つにまとめることができる。

- 1 二本一束の帯を二本用いて、弧を描く。
- 2 弧を左下から右上方向に描く。
- 3 文様一単位を収束させて描く。
- 4 透孔は弧を描いた後にあける。
- 5 二本一束の帯内部に線を描く。

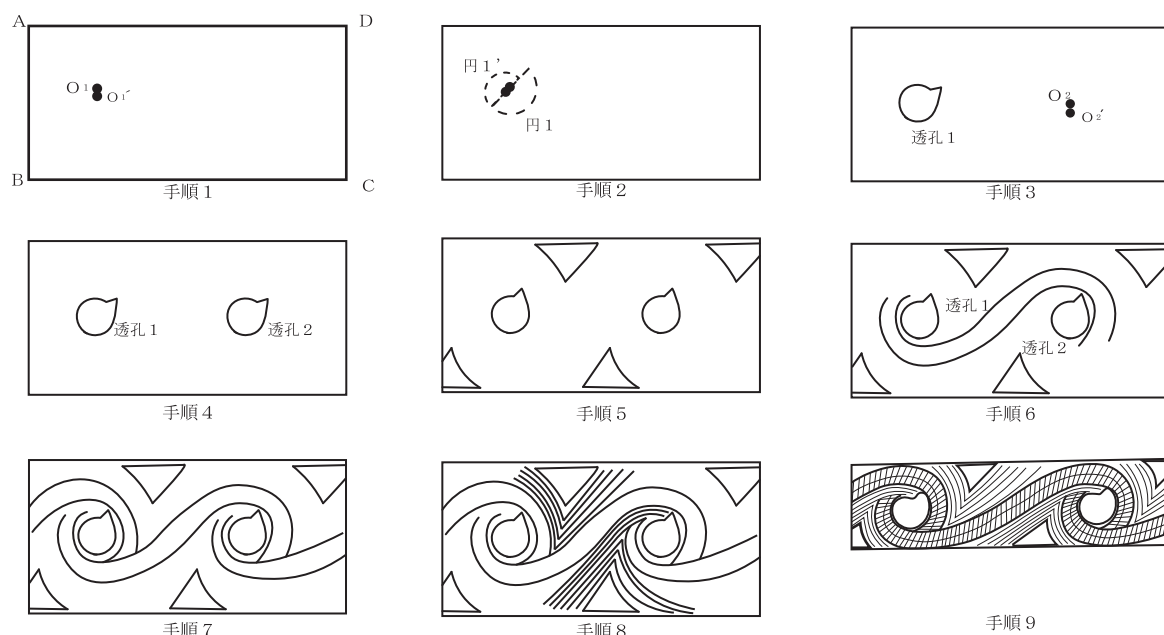
2 向木見型弧帯文

向木見型特殊器台に描かれた弧帯文の施文方法について実際に作図をおこなう（第4図）。弧帯文の作成手順は、該当資料から予測した。今回、参考にした資料は、岡山県児島市^{むこうぎみ}向木見遺跡出土の資料である。

手順1：文様帯に任意の点ABCDを定める。文様帯のなかに直線に並ぶ任意の点O1と点O1'を定める。

手順2：点O1を中心点とした任意の半円を弧が右下を向くように描く（図内の点線の間隔が狭い半円）（半円1）。同様に点O1'を中心点とした半円1より半径の短い半円を弧が左上を向くように描く（半円1'）。

手順3：半径の異なる二つの半円で作った巴形



第4図 向木見型弧帯文の施文方法

を透孔にする（透孔1）。また、右側に新たな点O2と点O2'を並べる。

手順4：点O2と点O2'を用いて、手順1から手順2を繰り返し、巴形透孔を作成する（透孔2）。

手順5：二つの巴形透孔を挟み、上下で重ならないように三角形透孔を作る。

手順6：透孔1の左上から右下に向かって弧を描く。透孔1に沿うように描いていくが、透孔2付近では逆に離すように大きな弧を描く。また、上記の線の下に並列した線を描く。

手順7：手順6の二つの線を同様に、文様帯を一周するように描く。

手順8：三角形透孔に沿う線を描く。

手順9：手順8で作られた帯内部に線を描く。
手順は、以下の四つに要約することができる。

- 1 二本一束の帯を二本用いて弧を描く。
- 2 弧を左上から右下方向に描く。
- 3 文様一単位を連続させて描く。
- 4 透孔は弧を描く前にあけ、透孔を中心に弧を描く。
- 5 二本一束の帯内部に線を描く。

3 宮山型弧帯文

宮山型特殊器台に描かれた弧帯文の施文方法について実際に作図をおこなう（第5図）。弧帯文の作成手順は、該当資料の、線の切りあい関係から予測した。今回、参考にした資料は、奈良県橿原市葛本くずもとべんてんづか天塚古墳から出土した資料である。

手順1：三角形透孔の四つの中心に任意の点Oを定め、点Oと直線上で並ぶ箇所点O'を置く。

手順2：点Oを中心とした半円を描く（半円1）。

手順3：点O'を中心とした半円を描く（半円2）。半円1と半円2の半径は、等しいものとする。半円1と半円2をあわせ巴形にする。

手順4：巴形を透孔にする。

手順5：巴形透孔の上部先端を点P1とし、点

P1から左方向に向かって弧を描く（円弧1）。

手順6：巴形透孔の下部先端を点P2とし、巴形透孔と円弧1に並行する弧を描く（帯1）。

手順7：帯1から三角形透孔に向かって、二本一束の帯を一本描く（帯2）。

手順8：右上にある三角形透孔の頂点と直線上で並ぶ箇所から、左側に向かって二本一束の帯を一本描く（帯3）。

手順9：手順1から手順8を繰り返し、特殊器台胴部を一周する。帯1'は帯1と同一の手順で構成されている。帯3'は帯3と同一の手順で構成されている。

手順10：左下部の三角形透孔から、帯1に向かって、二本一束の帯を一本描く（帯4）。

手順11：巴形透孔から帯4に向かって二本一束の帯を一本描く（帯5）。

手順12：帯5から帯2に向かって二本一束の帯を一本描く（帯6）。

手順13：帯4から左側に向かって二本一束の帯を描く（帯7）

手順14：手順9から手順13を繰り返し、特殊器台胴部を一周する。帯7'は帯7と同一の手順で構成されている。

手順15：二本一束の直線の帯を施す。

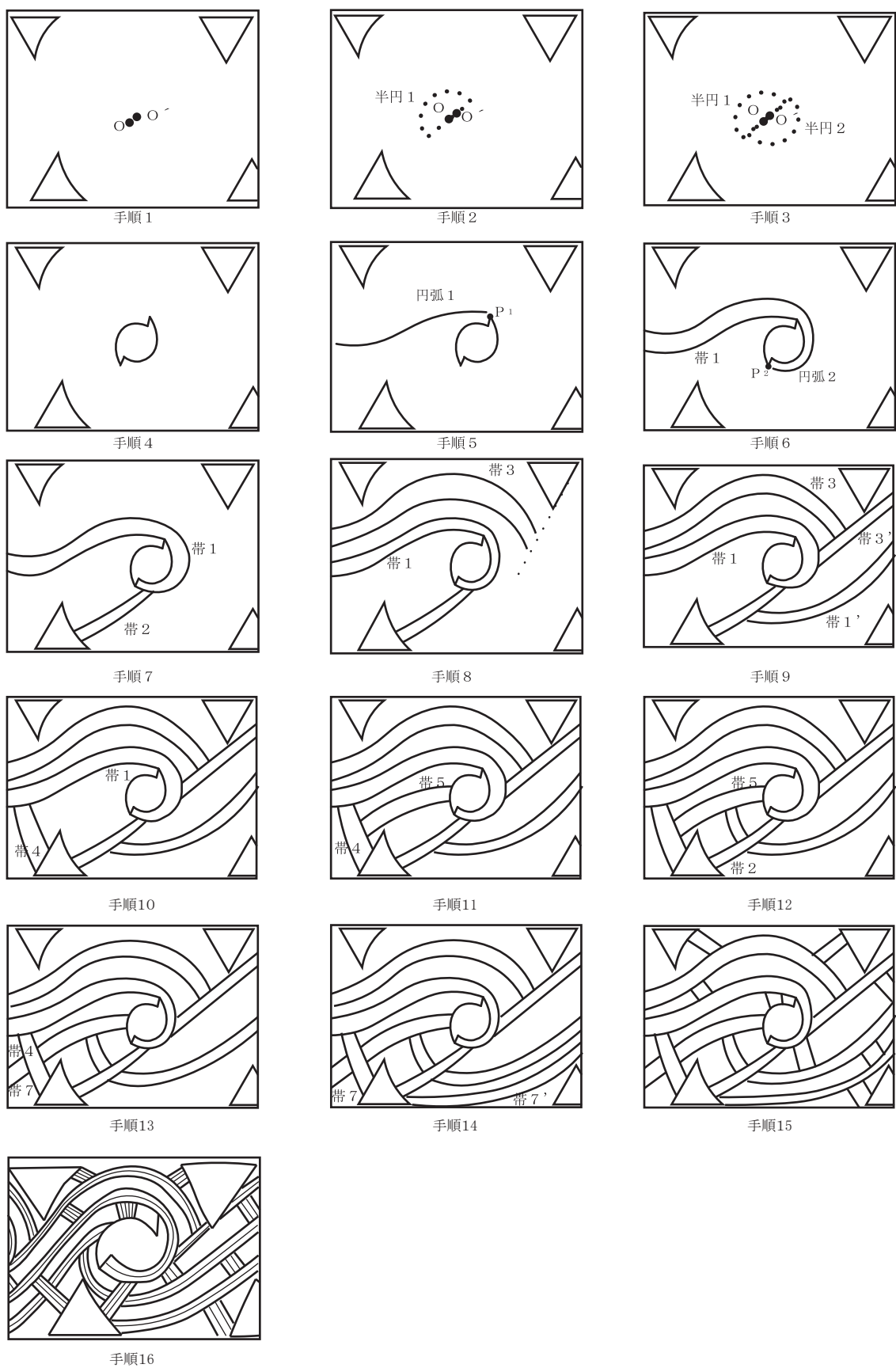
手順16：帯の内部に線を描く。

手順は、以下の五つにまとめることができる。

- 1 二本一束の帯を一本用いて、弧を描く。
- 2 弧を左上から右下方向に描く。
- 3 文様一単位を連続させて描く。
- 4 透孔は弧を描く前にあけ、透孔を中心に弧を描く。
- 5 二本一束の帯内部に線を描く。

4 都月型弧帯文

都月型特殊器台に描かれた弧帯文の施文方法について実際に作図をおこなう（第6図）。弧帯文の作成手順は、該当資料から予測した。今回、参



第 5 図 宮山型弧帯文の施文方法

考にした資料は、奈良県桜井市箸墓古墳出土資料である。

手順1：文様帯に任意の点 ABCD を定め、文様帯のなかに任意の点 O を定める。そして、点 O と直線で並ぶ点 O' を定める。

手順2：点 O を中心点とした半円を描く。

手順3：点 O' を中心点とした半円を描く。このとき、円 O' の半径は円 O の半径よりも短い。手順2の半円とあわせると巴形になる。

手順4：巴形を透孔にする。

手順5：巴形透孔に沿って下から弧を描く。

手順6：手順5の弧に並行する弧を大きく描く。

手順7：手順5と手順6の弧の端を弧線で結ぶ。

手順8：弧の内側を線で埋める。

手順9：三角形の透孔を空ける。

手順10：直線で文様帯を飾る。この際に二本一纏めの帯になるようにする。

手順11：手順10の帯内部に線を描く。

手順は以下の五つにまとめることができる。

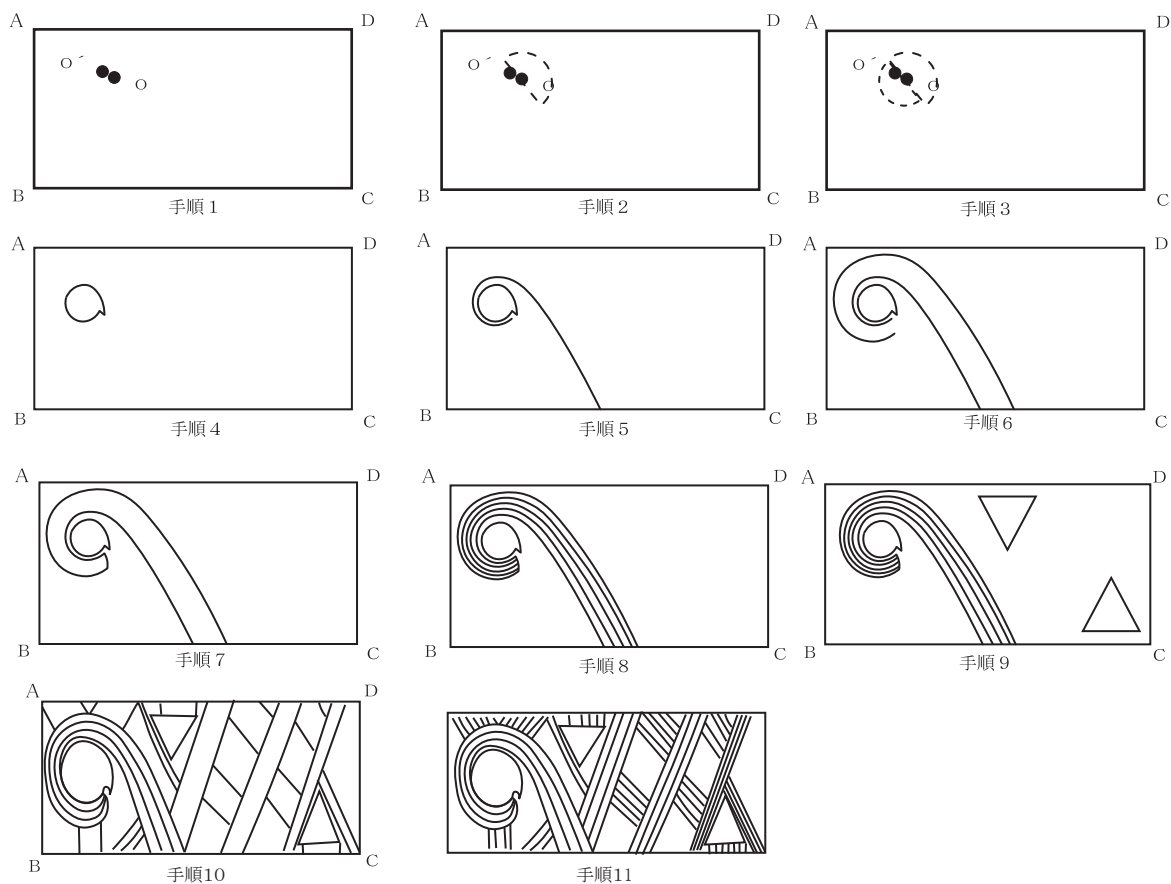
- 1 二本一束の帯を一本用いて弧を描く。
- 2 弧を左下から右上に描く。
- 3 文様一単位を収束させて描く。
- 4 透孔は弧を描く前にあけ、透孔を中心に弧を描く。
- 5 二本一束の帯内部に線を描く。

5 施文方法の分類と変遷

各型式の特殊器台に施文された弧帯文の施文方法について実際に作図をおこなった。施文方法の手順を以下の通りに分類することができる。

I－I：弧帯文を構成する二本一束の帯は二本である。

I－II：弧帯文を構成する二本一束の帯は一本である。



第6図 都月型弧帯文の施文方法

Ⅱ－Ⅰ：弧帯文の弧を繋げる帯は上から下に描く。

Ⅱ－Ⅱ：弧帯文の弧を繋げる帯は下から上に描く。

Ⅲ－Ⅰ：文様は一単位を連続させる。

Ⅲ－Ⅱ：文様は一単位で収束させる。

Ⅳ－Ⅰ：弧帯文を描く起点となる点（もしくは巴形透孔）が二つである。

Ⅳ－Ⅱ：弧帯文を描く起点となる点（もしくは巴形透孔）が一つである。

上記の施文方法の手順Ⅰ－ⅠからⅣ－Ⅱと特殊器台弧帯文についてまとめた（第7図）。

Ⅰ－Ⅰは、立坂型a類から宮山型までの間で用いられていた方法である。

Ⅰ－Ⅱは、向木見型から都月型までの間で用いられていた方法である。

Ⅱ－Ⅰは、立坂型a類からb類・宮山型から都月型までの間で用いられていた方法である。

Ⅱ－Ⅱは、向木見型から宮山型までの間に用いられていた方法である。

Ⅲ－Ⅰは、立坂型a類・向木見型から宮山型までの間に用いられていた方法である。

Ⅲ－Ⅱは、立坂型b類から都月型までの間に用いられていた方法である。

Ⅳ－Ⅰは、立坂型a類・向木見型から宮山型までの間で用いられていた方法である。

Ⅳ－Ⅱは、立坂型b類から都月型までの間で用いられていた方法である。

以上のことから、Ⅰ－ⅠからⅠ－Ⅱ、Ⅲ－ⅠからⅢ－Ⅱ、Ⅳ－ⅠからⅣ－Ⅱに、向木見型弧帯文や宮山型弧帯文を用いていた期間に弧帯文の施文方法は変化したのだと理解できる。

施文方法Ⅲと施文方法Ⅳは同様に変遷していることがわかる。これは、文様を一単位で連続させることと収束させることは、弧帯文を描く際の起点となる点（もしくは巴形透孔）の数と関連性があるからだと考えられる。

	Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ		Ⅳ	
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ
立坂型 a 類	■		■		■		■	
立坂型 b 類	■		■			■		■
向木見型		■		■	■	■	■	■
宮山型	■		■		■		■	
都月型		■	■			■		■

第7図 施文方法の変遷

施文方法の変遷から、向木見型弧帯文と宮山型弧帯文は、特殊器台弧帯文の過渡期であったと推測できる。特に、向木見型弧帯文が施文されていた、向木見型特殊器台は、特殊器台のなかでも出土数が多く、当該時期が特殊器台の最盛期であったと考えられる。このような多くの弧帯文が向木見型特殊器台に施されていくなかで、特殊器台弧帯文の施文方法が当該時期に変化していったのだと考えられる。

おわりに

本論では、特殊器台胴部に施された弧帯文の施文方法について述べた。その結果、施文方法を八通りに分類することができた。また、施文方法の変遷について検討をおこなった。弧帯文の施文方法は立坂型からはじまり、向木見型や宮山型で分岐した。このことにより、施文方法を組み合わせることで、様々な様相の弧帯文が出現するようになったのだと考えられる。

弧帯文は、弥生時代から古墳時代初頭に祭祀を執り行う際に使用されていた文様である。その起源がなにであるか、また、どのようなプロセスで弧帯文へと至ったのか把握することは、当時の吉備と諸地域の関係性を知る上できわめて重要である。そのため、今後は弧帯文の起源について、銅鐸の文様との関連性から研究をおこないたい。

参考文献

- 宇垣匡雅 2016 「特殊器台祭祀の性格とその波及」『古代吉備』第27集 pp.36～57
- 宇垣匡雅 2018 「弧帯文の特性」『古代吉備』第29集 pp.12～31
- 北島大輔 2004 「組帯文の展開と地域間交流—古墳出現期の伊勢湾地方を中心に—」『駿台史学』第120号 pp.67～106
- 狐塚省蔵 1977 「岡山県吉井町あたご山遺跡出土の“器台・壺”」『考古学雑誌』第63巻 第3号 pp.275～282
- 近藤義郎 1996 『新本立坂』総社市文化振興財団
- 櫻井久之 1999 「直弧文の成立とその意義」『ヒストリア』第163号 pp.151～174
- 櫻井久之 2013 「直弧文と文様モチーフ」『人々の暮らしと社会 古墳時代の考古学6』pp.197～211 同成社
- 白石太一郎・春成秀爾・杉山晋作・奥田尚 1984 「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第3集 pp.41～82
- 高橋護 1960 「児島市向木見遺跡発見の二・三の遺物」『考古学手帖』第12号 pp.4～5
- 高橋護 1984 「組帯文の展開と特殊器台」『岡山県立博物館研究報告』第5号 pp.1～27 岡山県立博物館
- 寺沢薫 2002 「マツリの変貌—銅鐸から特殊器台へ—」『銅鐸から描く弥生時代』pp.150～163
- 豊岡卓之 1996 「附篇1 葛本弁天塚古墳 第4章 出土遺物」『中山大塚古墳 附篇 葛本弁天塚古墳・上の山古墳』奈良県立橿原考古学研究所 調査報告 第82冊 pp.190～208 橿原考古学研究所
- 松木武彦 2002 「三世紀のキビのクニ」『考古学研究会例シンポジウム記録三 三世紀のクニグニ 古代の生産と工房』pp.3～32 考古学研究会
- 春成秀爾 2011 「埴輪の起源」『祭りと呪術の考古学』pp.445～474 塙書房
- 春成秀爾 2017 「宮山系特殊器台の研究」『岡山県立博物館研究報告』第37号 pp.5～26
- 春成秀爾 2018 「向木見系特殊器台の研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第212集 pp.183～233
- 真壁忠彦・真壁葎子・藤田憲司 1977 「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』第13号 pp.1～44

図版出典

- 第1図 1：近藤 1996 2：真壁ほか 1977 3：鎌木 1966 4：豊岡 1966 5：春成 2011
- 第2図 1～9：筆者作成 10：近藤 1966 よりトレース
- 第3図 11：筆者作成 12：真壁ほか 1977 よりトレース
- 第4図 1～8：筆者作成 9：高橋 1960 よりトレース
- 第5図 1～16：筆者作成 17：豊岡 1996 よりトレース
- 第6図 1～10：筆者作成 11：白石ほか 1984 よりトレース
- 第7図：筆者作成